別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　長谷　守紘

論　文　題　目

中学校教師が直面する生徒指導上の危機とそのサポート

―校内外の身近なサポート源の有効活用を目指して―

論文審査担当者

主　査　名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　窪田由紀

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　平石賢二

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　石井秀宗

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は生徒指導上の危機に直面した中学校教師の回復，さらに成熟に至る過程を検討することによって，効果的な支援体制整備に向けての提言を行おうとするものである。

今日の価値観の多様化，高度情報化，少子化などの時代背景の中で，学校を取り巻く環境は大きく変化してきている。また，現在教師の大量退職，大量採用が進み，世代交代の時期を迎えている。そのような中で，教育現場における各世代の教師にかかる精神的な負担は増加し，精神疾患による病気休職者も多い。教師バーンアウトを予防することは今日の教育現場において喫緊の課題となっている。

これまでの教師バーンアウトの研究動向を見てみると，バーンアウトの中核的要因には，教職の特質でもある職場内の人間関係における危機がある。特に，中学校教師は人間関係における危機の中でも生徒との関係における危機，つまり生徒指導上の危機をきっかけにバーンアウト傾向を強めていく場合が多いことがわかっている。また，危機を乗り越えたときには教師の成長につながることも指摘されてきた。

そこで，第 1 の課題として，生徒指導上の危機に焦点化し，現場の中学校教師がどのような危機に直面し，その危機をどう認知し，どのように対処したときに，どのような成長を果たしていくのかといった個人の内的な過程について質的研究法を用いて詳細に分析することを挙げる。その中で，第 2 の課題として，危機を乗り越える経験が与えるポジティブな側面に着目し，つまり生徒指導が成熟していく過程としてのキャリア発達をより詳細に検討することを挙げる。それによって，バーンアウトを予防するのみならず，キャリア発達を促すことができると考える。第 3 の課題として，生徒指導上の危機に直面した中学校教師を支援するために有効とされるソーシャル・サポートについて，どのような状況において，誰の，どのようなサポートが，どのように作用し，危機を乗り越え，危機から回復し成長に向かったのかといったプロセスを分析することを挙げる。実際には教員文化の中に脈々と内在化されている相互サポートが存在する。それを現象として記述することによって，生徒指導上の危機に直面した中学校教師のサポートの在り方を探ることができると考えられる。

これらの課題を踏まえて，本研究では，生徒指導上の危機に直面した中学校教師のナラティブを手がかりとして，危機とそこからの回復のプロセスモデルを生成することを目指すとともに，事例による検討も行い，効果的な援助のタイミングや成熟に至る認知的変容まで明らかにしようと試みており，その上で，生徒指導上の危機に直面する中学校教師を校内外の身近なサポート源を有効活用したサポート体制の構築に向けての提言がなされている。

第 1 章では，これまでの教師バーンアウトの研究動向を概観し，中学校教師が直面する生徒指導上の危機とそのサポートに関する研究の現状と課題を明らかにし，今後の課題として，3 点を指摘している。第一に，バーンアウトの中心的な課題である人間関係における危機を中心に生活場面などの職場以外の要因や危機がもたらす教師の成長要因を多角的に分析

し，質的

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

研究法を導入する必要性，第二に，特に生徒指導上の危機に着目し，実際に現場の中学校教師がどのような危機に直面し，その危機をどう認知し，どのように対処したときに，どんな成長を果たしていくのかといった過程を詳細に分析する必要性，第三の課題として，サポート研究において，危機からの回復や乗り越えの過程を詳細に検討し，有効であった内的・外的要因やタイミング，そのときの被援助者の認知的変容を明らかにしていくことを掲げ，これらを通してバーンアウトを予防するのみならず，生徒指導が成熟していく過程としてのキャリア発達を促すことができる可能性を提示している。

第 2 章では，中学校新人教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデルを作成することによって，中学校新人教師が直面しやすい生徒指導上の危機や回復の過程で有効であったサポートの内容，危機が与えるポジティブな側面を検討している。Z 県公立中学校教諭 5 名を対象として，中学校新人時代に直面した生徒指導上の危機についてのインタビュー調査を実施し，KJ 法に準じた分析によって，「中学校新人教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデル」を作成している。中学校新人教師が直面する生徒指導上の危機は，組織に及ぼす影響度が低いものの多領域にわたる場合が多く，深刻な状況に陥りかねないが，その背景には職員集団の構成アンバランスや援助要請への抵抗などのリスク因が存在していた。新人教師は，情熱をもって危機に立ち向い，脱人格化傾向を高め，バーンアウト寸前まで自分を追い込むが，周囲が新人教師が出すサポート希求を捉え，危機の状況と危機に対する新人教師の認知に応じて，職場内の先輩同僚の道具的サポートと同世代同僚の情緒的サポートを行うことが有効であることが示された。危機を乗り越えた経験は，現場に即した教育観・生徒観へ成熟を促し，後輩への援助志向を高めて教員文化に内在化される同僚性を育くむことも明らかになった。

第 3 章では，中学校中堅教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデルを作成することによって，中学校中堅教師が直面しやすい生徒指導上の危機や回復の過程で有効であったサポートの内容，危機が与えるポジティブな側面を検討している。Z 県公立中学校教諭 4 名を対象として，中堅時代に直面した生徒指導上の危機についてインタビュー調査を実施し，KJ 法に準じた方法で「中学校中堅教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデル」を作成している。中堅教師は，組織に及ぼす影響度が低いものから高いものまで複層的な生徒指導上の危機に直面していたが，中堅教師は，脱人格化(回避型コーピング)を用いてバーンアウト傾向をコントロールするが，それは葛藤を生み出し，本質的自己の課題に直面することとなっていた。危機の背景には，ワークライフバランスの課題や責任ある立場として困難を 1 人で抱え込むといったリスク因が存在しており，中堅教師のサポートには，個人とリスク因となる職場内外の環境との相互作用を意識したり，学校に潜在する支援的ネットワークを活性化させたりする必要があることが明らかにされた。同年代の道具的サポートや管理職の情緒的サポート

を受けてチームとして危機を乗り越えていった経験は，チームによる問題解決を志向させ，ミドルリーダーの役割獲得を促し，管理職へ向かっていくキャリア発達上の重要なターニングポ

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

イントであると考察されている。

第 4 章では個人に経験された時間の流れを重視する複線径路・等至性アプローチ（TEA） を用いて，有効なサポートのタイミングや成長に至る被援助者の認知的変容といった詳細なプロセスを検討している。Z 県中学校教諭 D に再度協力を依頼し，合計 3 度のインタビューを行った後，KJ 法に準じてカテゴリー化を行い，教師 D の「中学校教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデル」を図解化している。その結果，危機に至る過程では，小学校から中学校への異動 1 年目，新しい職場において一から生徒や同僚との人間関係づくりに取り組まなければならなかった教師 D にとって，中学生に対するリアリティショック，同僚性の課題が関与していること，一方で教師 D が危機を回復していく分岐点(BFP)は，〈学年主任への報告〉と〈生徒との付き合い方を見直す〉ことであったこと，その分岐点に大きく作用した社会的助勢(SG)は，学年主任が普段から行ってきた教師 D との関係づくりと教師 D の生徒観を変容させる適切な介入であったことを確認している。危機を乗り越えたことで精神的な成長を感じ，苦しんでいる人の気持ちを理解したことが後輩への援助志向へつながり，生徒指導上の成熟という等至点(EFP)に至ったというプロセスを抽出している。

第 5 章では，新人期と中堅期のプロセスモデルを比較しながらこれまでの章の内容をまとめ，生徒指導上の危機に直面する中学校教師への，校内外の身近なサポート源を有効活用したサポート体制の構築に向けての提言を行っている。１点目として，危機後には成熟がもたらされるというポジティブな発想をもつことの重要性が挙げられている。その背景には，ソーシャル・サポートを得て生徒指導上の危機を乗り越えた経験は，高度な技法である職人性を高めることや教員文化に内在する同僚性を育むことにつながっていたとの発見があった。２点目として，リスク因と緩衝要因に着目した 2 つの働きかけ，即ち，リスク因である援助要請への抵抗を低減するためには協働的職場風土を校内に普及させ，同僚との積極的交流を促す必要があること，緩衝要因である校内のサポートを促進させ有効化するためには L 型の関係性を同僚と築く必要があることを指摘している。L 型とは具体的には，タテの道具的サポートを中心にヨコの情緒的サポートが可能な人間関係を構築することで新人教師を効果的にサポートすることができ，ヨコの道具的・情緒的サポートを中心にタテからの道具的・情緒的サポートが可能な人間関係を構築することで中堅教師を効果的にサポートすることができるというものである。これらを踏まえて，予防・準備から対応・回復に至る危機予防の各段階において，管理職やミドルリーダーがそれぞれの立場からマネジメントを行って危機に備え，今後の生徒指導上の危機に直面する中学校教師のサポート体制の構築を行うための具体的な手立てを示した。

最後に本研究の限界と今後の課題として，研究協力者の地域的な偏りや人数の不十分さから，生徒指導上の危機発生や回復に関わるリスク要因・緩衝要因を捉え切れているとは言えないた

め，より幅広い視点からの検討が必要であることや生徒指導上の危機以外の危機に焦点を当てた検討も必要であることが掲げられた。

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，学位請求者自身の臨床心理士資格を持つ中学校教師としての現場実践から創出された，「生徒指導上の危機に直面した教師の回復をいかに促進し，キャリア発達を促すか」というリサーチクエスチョンに基づくものである。教師のバーンアウト防止は，現在の教育現場の喫緊の課題の一つであるが，本論文では，バーンアウトとの関わりが深いとされる生徒指導上の危機への遭遇とそこからの回復の過程について，9 名の教師へのインタビューに基づいて検討し，新人期，中堅期それぞれのモデルの比較検討から，危機に関わるリスク因，それらの認知と反応，緩衝要因について，共通要因と特異要因を抽出し，それに応じた支援体制についての提言を行っている。本論文は，バーンアウト防止にとどまらず，危機後の成熟を視野に入れた検討を行ったこと，教師文化の中で暗黙に行われてきた次世代育成や同僚性による道具的・情緒的サポートを，「いつ，何について，だれに，どのように」提供されることが効果的かというところまで具体的に可視化した点で，一定の意義を持っている。

一方，本論文に対して審査委員からは以下の指摘がなされた。

１）「生徒指導上の危機に直面した中学校教師」が対象ではあるが，得られた知見は，労働者一般にも共通するものであり，必ずしも中学校教師に特有のものとなっていないのではないか。さらに他の対人援助職との異同についても明らかにする必要があるのではないか。

２）第 4 章で提示している TEM 図において，生徒指導上の成熟の補集合としてバーンアウトを位置づけているのには，論理的に不適切ではないか。

３）対象者はいずれも危機から回復して教師を続けている人であり，続けられなかった人（バーンアウトした人）との分岐点は十分明らかにできていないのではないか。

４）新人期と中堅期の比較検討を行う前に，いずれかに焦点化してより丁寧に分析する必要があったのではないか。

５）（申請者も指摘しているように）サンプリングの代表性には疑問が残り，結果の一般化には慎重である必要がある。量的な研究も併用して幅広くとらえることも必要だったのではないか。

これらの指摘に対して，博士学位請求者は十分に認識しており，質疑に対する回答も具体的かつ適切なものであった。今後のさらなる研究によって補うことが可能であると判断した。

以上を総合して，本論文は教師のバーンアウト防止とキャリア発達研究に新たな視点と知見を提供するとともに，今日の教育現場における支援体制構築に資するものと認められた。

よって，審査員は全員一致して，本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し，論文審査の結果を「可」と判定した。